

平成 24 年年度 順天堂大学 小論文 (70 分)

〈解答例＝内倉〉

「The Walk To Paradise Garden」と題された写真が意味するところは、字義通り「楽園の地へのあゆみ」であるが、別視点では原題のイメージとは対照的な兄妹の心境を想像させる。光の方へ歩を進める幼い兄妹の心の中は、「楽園」という言葉から私たちが連想する積極的な有り様とは裏腹に、大きな不安と恐怖が覆っていることは想像に難くない。

たしかに、私たちはこの写真に、妹を先導しようとする逞しい兄の姿と、兄にすべてを預けるしかない健気な妹の姿を見ることができる。いかに大きな不安と恐怖あっても、それらを打ち消すだけの光が二人を勇気づける。言うまでもなく、兄には打算的な考えなどない。あるのは小さい妹の期待を一身に背負っているという責任感であり、それが一步一步のあゆみを力強いものにしていくだろう。

しかし、この写真の「今」に注目すれば、自意識が芽生えつつある兄の心の中に、あゆみを慎重にさせる要素を読みとることができる。「今」に注目するということは、とりもなおさず、「今」を成立させた過去を想起することだ。兄妹が向かっている中央の明るみは明るい未来を暗示するが、兄妹の「今」を支えているのは、時間的にも空間的にもこれまで二人に過酷な試練を与えてきた過去である。

兄は勢い勇んで駆け込んではいないと考える。兄の勇み足を制するのは今の状況を作った過去である。兄は無意識のうちに、今に至るプロセスをはかりにして目の前に見える光の光度を測ろうとする。また同時に、光の輝きはこれから先の一瞬一瞬の選択によってかわることを自覚しつつある。そういった意味において、兄妹の「楽園の地」は、大人へのあゆみの末にこれから形作られる。